優秀賞

私のシンボルツリー

星野　有加利　　静岡県富士市　　三十五歳

「私の木、まだあったんだ！」実家の庭でユーカリを発見し、懐かしさに顔が綻んだ。
緑の指を持つ父は子供が生まれる度、木を植えた。兄にはサツキ、姉には百日紅。そして私の木はユーカリ。ユーカリの漢字表記は有加利。私の名と同じ。
その時、背後から父の声がした。
「ユーカリは不要な枝葉はどんどん挽いで脱ぎ捨ててゆく。余分なものは自力で捨てる力を持ち、必要な養分だけ蓄え、上へ上へ伸びてゆく。とても生命力の強い木なんだ」振り返ると昔と変わらず後ろから見守ってくれる優しい眼があった。父の言葉は胸に響き、改めて人間の愚かさを痛感した。
人間は不要なものまで欲をかいて欲しがる煩悩の生き物。だから、どんどん色んなものを背負い、自らを重たくしてゆき、気づいた時にはもう身動きが取れなくなっている。…そう、今の私のように。
私は出世と名声を望む余り、焦って仕事で大失敗し、傷心のまま久しぶりに帰省したのだった。
――ユーカリのように謙虚に、向上心を持って上を目指し逞しく生きなきゃ。
私の木と父に励まされ、私は再び進み始めた。
そして数年後、結婚が決まった。彼が挨拶のため、近々実家に来る。　母の話を思い出し、思わず失笑した。
『ユーカリは匂いが強いから防虫効果もあるの。パパね、可愛い娘に悪い虫がつかないように願掛けでユーカリを植えたのよ？』
――パパ、待ってて。もうすぐ良い虫を連れてくから。